

清水 正の

一里一尺

～自然をたずねて～ ⑭

春の交響曲の開幕



この頃は温暖化の影響を受けてか季節の進行が早いように思えます。私の写真フォルダを探っても同じ場所で撮った同じ花の月日が少しずつつ前倒しになっています。とは言え足早ではありますが、まだ日本の四季は美しい自然を映し出してくれます。日本人は古来よ

りこうした季節の移ろいを二十四節気とし、さらに細かく気象の動きや動植物の変化を知らせる七十二候と言う歳時記にして親しんできました。この歳時記は優れもので、私たち自然を観察するものにとって一つの指標を示してくれます。

ちよつとそこまで

土筆を摘みに

冬の万歩計は毎日歩数があまり出ません。やれ蟬梅だ梅だと言つて二月も半ばを過ぎると春の訪れを感じます。ましてや雨水ともなれば一雨一雨ごとに雪も溶けて暖かくなり、地面の色も茶色から緑へと装いを変えてしていきます。奥三河に日本で一番早いセツブンソウが咲くと聞き、友人と新城というところに出かけました。も

うすっかり満開でした。花を咲かせ、実をつけると来春まで地上から消えてしまうスプリングエフェメラルの一つです。近くにツゲの自生する山があると聞いていたので、そこにも足を伸ばしました。地名も黄柳野です。近隣の山にあるイヌツゲは名前こそツゲと入っ



ツゲ(葉が対生になっている)



セツブンソウ(新城)

ていますが、全く別物で櫛の材にはなりません。林道の両脇にツゲがいっぱいありました。この二つの植物はいずれも好石灰岩植物といわれ石灰岩や緑色岩地質のところではか自生していません。不思議なもので両方の生育している場所から少し外れたらいずれも生育していません。

三月に入って暖かくなってきた



土筆の出始め(向島)

頃、運動不足解消がてらふらりと近くの巨椋池干拓田の畦を歩きました。ゆっくりと歩いて探していると地面から顔を出したばかりの土筆が見つかりました。ほんとに出たばかりの小さな土筆が固まっていた。一つ見つけると次から次に見つかります。人間の目というのはすごいもので、この土筆はこんな形・色と認識すると、どんなところにあってもすぐに見つけ出します。ワラビやきのこを採りにいったら一本見つけると次から次と見つけられます。良く言うところのワラビ眼・キノコ眼というやつですね。それを見た妻が、後日友人と摘みに行き持ち帰りしました。そのはかまを取ってわが家の夕食に卵とじとして食卓を飾りました。はかまを取るとき、沢山の緑の粉を落としました。土筆の

胞子です。この胞子に息を吹きかけると、息に含まれている水分で胞子が弾ける様子が実体顕微鏡で見ることが出来ます。すごく面白い。家に実体顕微鏡がなければwebで「つくしの胞子」と検索掛ければこの様子を見ることが出来ます。是非見てください。

カニの眼をした オオイヌノフグリ

畦には濃いピンクのホトケノザや澄んだブルーのオオイヌノフグリ、白いタネツケバナなどが私たちの天下とばかり咲きほこります。季節が移るともっと大きな花や目を引く花に人氣は移り雑草として見向きもされなくなりますが、この時期のオオイヌノフグリやホトケノザの赤や青の絨毯は人の目を独占するほど見事です。以前、観

察なかまとも一緒に歩いていた時、友人がオオイヌノフグリの前で這いつくばるようにして写真を撮る姿を見ました。「何を撮っている?」と聞くと、「オオイヌノフグリの雄しべ、これが面白いんです」「何で?」と聞き返すと「花芯から立ち上がる二本のおしべの先の紺色の葯が弾けて、中から白い花粉が一筋出てくる。それがまるでカニの眼のように見えるんです」私も這いつくばって見てみると、丁度いい状態のもを見つけました。思わず「なるほど」と感心したのを覚えています。以後この季節に



オオイヌノフグリ
(雄しべがカニの眼みたいです)

なると私もオオイヌノフグりに向かってシャッターを押すようになりました。他の小さな花もマクロでとるとおもしろい発見が出来ます。



ホトケノザをクローズアップ
(何に見えますか)

スマイレの季節始まる

啓蟄から春分の候ともなると一層多くの草花が咲き、越冬昆虫も飛び交うようになり賑やかな世界が広がります。三月一五日北山の市原あたりはまだ春の目覚めとまではいかなかったが、私にとっては今年初見のスマイレに出会いました。何とニオイタチツボスマイレでした。匂いを嗅と芳しい香りが鼻腔をくすぐりました。香りばかりでなく濃い青紫色の花弁の真ん中を抜けるように白くなっているのが美しいです。一七日の毎月行っている南丹のモニタリング調査に出かけました。いつもの畑の法面には出たばかりのフキノトウが見られ、ヤブカンゾウも芽吹きしだしていました。早速フキノトウを摘ませてもらい、ふき味噌にして今年第二弾の野草料理としました。里道沿いでは春一番のダンコウバイとアブラチャンの可愛らしい花を愛でることが出来ました。斜面を登りウグイスカグラの薄く赤味をおびた花の写真もとることが出来ました。山に登ると日当たりの



フキノトウ



岩陰に咲くユリワサビ

良い斜面には日本海型タチツボスミレがそこに咲いていました。神社の社叢に入るとユキワリイチゲやミヤマカタバミが近づきで出番を待っています。いつもはここまででしたが社叢の奥の緑色岩の礫が転がった斜面を登ってみることにしました。するとユキワリイチゲにしてはあまりにも葉に切れ



早春に里を彩る
ダンコウバイ
(ウスノキ科クロモジ属)

込みがある不思議な個体を見つけた。あわせたユリワサビ（ここで初めて見た）を発見し満足のいく一日となりました。二日後、山城南部に出かけると陽射しが良くあたるのか、川沿いの道にタチツボスミレ、村里ではヒメスミレと随分たくさんスミレが待っていてくれました



満開のユキワリイチゲ

た。この日、最も見たかったシロバナショウジョウバカマやユキワリイチゲも見ることができました。特にユキワリイチゲは満開の状態です。南丹市との気候の違いを感じさせられました。

日本は生物多様性スポット

春分を過ぎると一週〜二週の単



ほのかな香りの
ニオイタチツボスミレ



里の人家近くに咲く
ヒメスミレ

位で花が入れ替わり私たちの眼を愉しませてくれます。日本は世界生物多様性ホットスポット三六に指定（二〇一七）されている生物多様性が極めて高いところです。

同時に原生の生態系の七割以上が改変された地域で絶滅種が増えている地域でもあります。先頃、京都府レッドデータの改訂が行われました。ここに示されるように多くの生物が希少種としておさめられ、益々希少種の増加が危惧されています。自然を愉しみながら、こうした問題の因って来たる原因はどこにあるのか、自然環境を保全するには何が必要なのかといった問題も考えてみたいものです。

自然のダイナミズムを感じよう

この号が届く頃は立夏となり、草に遠慮して陽射しを遮らないよ

うにしていた樹木たちもようやく若葉を広げ花を咲かすようになります。上も下もと首が疲れるかもしれないませんが、この時の自然のダイナミズムを大いに感じたいものです。終わりに近づきましたが、私の拙い分では捉えきれなかった静かに、そして賑やかに訪れる春の描写を「自然の愉しみ方〈春〉」（山と溪谷社）の一節から引用したいと思います。この文は私が敬愛する植物生態学者多田多恵子さんによるものです。

「草が萌え、前座の花たちが舞台の袖に消えると、いよいよ春の交響曲の開演だ。サラサラと小川のせせらぎに導かれて、葉の花のヴァイオリンが最初のテーマを奏で始める。優しい旋律に、うとうととしていた草の芽も心地よく芽を

覚ます。

母なる太陽の指揮に合わせて、花たちは次々に顔を上げる。地にはいつくばっていたロゼッタも、まっすぐに背筋を伸ばして立ち上がる。春の草花たちは、背の高いライバルたちがぐんぐん育ち始めるよりも早く、ともかくスタートダッシュで空間を確保し、急いで花をつけるのだ。活動を始めた虫たちを呼び寄せようと、花たちは競い合って花びらを広げ、野原の第一楽章はクライマックスに向けて一気に盛り上がっていく」

そして初夏、果たしてどんな花や虫・鳥たちが待っていてくれるのでしょうか。野から山、そして少し高い山へ足を運びませんか。きつと心豊かに元気をもらえることと思います。